

# 北海道の赤ひげ先生といわれて

NHKラジオ  
明日へのことば  
2012年9月18、19日

道下俊一 86歳

浜中町立診療所 名誉所長

昭和27年3月8日の十勝沖地震津波、昭和35年5月24日のチリ沖地震津波で、霧達布町はほとんど壊滅的な打撃を受けた。そういう地域で47年間、8千5百人にたった一人の医者として仕事をしてきた。札幌に戻り12年。リタイアを考えていたが医者不足で今も働いている。現在86歳、身体はガタガタ。大動脈瘤は3回経験。

自分はカラフト生まれ。パルプが豊富で炭鉱は賑わっていた。昭和20年の終戦時、最後まで医者で残されたが無事帰国。北大医学部を再受験し昭和25年に卒業。昭和26年、世話になった第二内科・中川教授の依頼で1年間長期出張、霧達布に行くことになったが妻はいやがった。

釧路日赤病院浜中診療所に赴任した時は、2月という季節でもあり、夜行でたち根室本線の浜中という駅に朝、降り立ったのは猛吹雪の中。霧達布までのバスもなく13kmの道程を歩いて行った。

明治初期に建てられた診療所は4、5人が入ると一杯になる待合室。看護婦2人、合計5人のメンバー。強烈なクレゾールの臭いが漂っていた。ネクタイをはずし、霧達布弁をならい地域によりそった。5月ごろには待合室は人で溢れた。そして、診療所の仕事が軌道に乗ってくると近隣の集落への往診がある。現在のように車があるわけではなく、何kmも歩いて行く事が多かった。一回8kmは歩いた。

ある時、加藤和彦をひ引く張ってきた。彼は漫画すきで皆にかわいがられた。レントゲンの現像担当。後のモンキーパンチ、ルパン三世の作者の加藤和彦。東京へ行って10年後、マンガで食べられるようになった…のハガキが届いた。

霧達布は今も観光地。昭和28年頃、青物はなかった。缶詰と玉子の生活。一年が過ぎ、札幌に帰れると喜んで荷造りを始めたが先生を帰らすな！と玄関前に人が群がった。「もう少し役立つ医者になって帰ってくるから、札幌に帰してくれよ。」という日が続いた。

ある晩玄関がガタッと音がしたので行ってみると、胆石の発作で時々往診に行かなくてはならないキク婆さんが蹲っていた。「先生、ここに居てくれ！」哀願というよりは、絶叫でした。道下先生は、土間に降りて婆さんの手を握って「婆さん、俺居るぞ。居るからな。」というと、婆さんが「本当に居てくれるか、そうか、そうか。」と言って涙を流して道下先生の手を握り返した。

何かかと思つて奥さんが玄関に出てきて、先生と目が合った。その状況を見て、奥さんは先生にうなずいてくれたそう。それから毎年春になると荷造りをする、町の人がある、荷物を解く、そんなことが年中行事となって8年が経った。

冬は、湯たんぽを抱いて毛布を被って馬ゾリに乗って往診をしたり、しけた時でも「焼玉エンジン」の船で行くこともあったようです。海上でエンジンが止まったり、岸辺のかがり火を頼りに暴風雨の中を往診したこともあった。

診察が終わり、濡れた服を乾かしていると往診先の婆ちゃん、「俺が作ったうどん食べてくんねか」と言っ出てくれたのを「うめな、お替り」と言っうどんを美味しく食べた。翌日、「今度来た先生は、俺んちのうどん美味いって言っ食べてくれたぞ」と集落中に噂が広がっていった。「カルテの裏側がわかって(人生・経済問題など)、はじめて診療できる」患者との対話が必須。今の先生は対話が少なすぎる。

死に目に会いながら往診を続けていた中で、内科の医者として赴任したが、心配していた手術を必要とする患者さんが現れた。診療所へお腹を押さえ母親に背負われやってきた娘さんは盲腸炎。麻酔をして手術をしたが心臓はドキドキ、喉はからから…生も根もはてた。「今度来た先生は、盲腸まで出来る。釧路まで行かなくて済むぞ。」と話題になってしまう。盲腸が出来るんだからお産も出来るだろうと町の人は勝手に思い込んで診療所に駆け込んでくるようになり、お産も何度かやった。吹雪になると停電になりローソクで手術をしたこともあった。

そして昭和35年5月24日朝、玄関をドンドンと叩く音で目を覚ました。「先生、津波が来るぞ。俺が船を出そうとしたら、海が無くなっている。津波が来るんだ！」と道下先生の家族、患者は、歩いて10分位の山の寺に逃げ始めた時、7・8mの津波が霧達布の街を飲み込んできた。11名が亡くなった。14回、津波は押し寄せた。小学1年の子供が「怖いよ！」とよってきた。はしか、にく疱瘡がはやり寝ないで対応した。

ある日、湿原に沈む夕日を見ていた時、ふと一つのことを気付いた。「8年間で二度も家・船・財産を失った人たちが一人として霧達布を引き上げていない。」そのことに気付いた時、道下先生は寒気を感じた。診療所に戻った時、高校生の患者さんが待っていた。「お前んとこ、またやられたな。こんな怖いと居ない方がいいんじゃないか。」と言ったところ、その高校生は、道下先生を睨み付けるように「先生、ここは俺の故郷だ。故郷を簡単に投げられるか。」

その時、先生は「故郷」について考えた。確かに生まれたところが「故郷」かもしれないが、「心に留めたところ」も故郷であり「自分の生き様を知ってくれる人が居るところ」も故郷だと気が付いた。家に帰り妻に、ここは自分の故郷だから札幌には帰らないよ！言っ。霧達布生活の第二弾がここから始まった。

12年前に札幌に戻る時は涙・涙・涙。村は診療所の土地も建物もすべて先生のものにするから残って欲しいと言われた。霧達布には通算47年いた。「町づくりはひとづくり」子供達に剣道、礼儀作法を教えた。霧達布の太鼓には春夏秋冬のシナリオがある。地域に貢献したということで、吉川英次章を受賞。地域医療、予防衛生に歩き回り、母校・北大の特別賞第一号を受賞した時は嬉しかった。妻の支えのおかげで僻地医療がこなせ、妻には感謝している。賞はふたりでいただいた賞だ。半生振り返って、「カルテの裏側の大切さがわかっただけでもよし」とする。